

英語部会 研究の構想（案）

平成24年度～

I 研究主題

コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか。

II 主題設定の趣旨

英語は世界で広くコミュニケーションの手段として用いられている。グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。

2021年度全面実施の新学習指導要領では、さらに取り扱う言語材料（語彙や文法事項）が豊かになっている。また、英語科の目標に加え、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やりとり）」「話すこと（発表）」「書くこと」の4技能5領域別の目標も設定された。これまでも、各校においては、言語活動を充実させ、言語材料の定着を図るとともに、コミュニケーション能力の一層の育成を目指す指導を続けてきた。コミュニケーション能力を育成するためには、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することが大切である。さらに、一層の語彙の充実によって言語活動に広がりや深まりをもたせることが可能となっている。今後も、3年間で育てたい力を明確にし、生徒の学習段階や習熟の程度を考慮しながら既習の内容を繰り返し指導して言語材料の定着を図っていききたい。また、生徒の興味・関心や発達の段階に応じた適切なテーマを取り上げ、4技能5領域を総合的に育成するような言語活動の充実にも留意したい。そして、基礎的・基本的な内容についての指導を十分に行うとともに、知識・技能を活用し、実際に英語を使用してコミュニケーションを図る言語活動の工夫について研究を進めたい。

また、平成30年度から始まった小学校の新学習指導要領移行措置期間を見据えながら、小・中学校、さらに高等学校との連携を推進し、接続を意識した指導計画を作成したり、各学年の4技能5領域の到達目標を具体的に設定したりするなど、指導計画の在り方や指導と評価の工夫、学力調査等における分析結果の活用等についても、引き続き研究を進めたい。

小学校外国語活動で育まれたコミュニケーション能力の素地の上に、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識を活用し、自らの体験や考え等と結び付けながら、「話すこと」や「書くこと」で発信できる技能が身に付くよう指導するなど、領域を有機的に関連付けた領域統合型の言語活動を授業に取り入れ、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培っていききたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

コミュニケーション能力の基礎を養うために、3年間の見通しをもった系統的な指導計画の作成や生徒が意欲的に取り組める言語活動の在り方、指導に生かす評価の工夫等について研究と実践を行う。そして、研究主題と研究内容（P）、授業研究と研究発表（D）、学力調査等（S）のトライアングルの関係を意識し、コミュニケーションを図る活動の質の向上を目指す。

2 研究の内容

(1) 指導計画の工夫

小・中・高の学びの接続を意識し、3年間の見通しをもって、各学年の4技能5領域の到達目標を定めて指導計画を作成する。特に第1学年の導入段階の指導計画を工夫する。

(2) 言語活動の工夫

コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を設定し、自分の体験や考え等をお互いに伝え合うことができるように指導する。

(3) 指導方法の工夫

生徒の学習意欲を喚起するような指導方法を工夫する。

(4) 指導と評価の一体化

学力調査におけるS-P表等を利用した分析結果を指導の改善に生かす。また、目標に準拠した適切な評価方法を工夫する。

英語部会 平成31年度研究計画（案）

I 研究主題

コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか。
— 4技能を総合的に育成するための言語活動を通して —

II 主題について

現行学習指導要領において、小学校の外国語活動では、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標とし、中学校英語では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の言語活動を通して、「実際のコミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標としている。授業時数及び指導語彙の増加に伴い、4技能を総合的に育成するための言語活動に重点を置き、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図るとともに、実際の言語の使用場面でのメッセージの授受を通じた思考力・判断力・表現力等の育成について指導と評価の方法や指導過程の研究を進めてきた。

各地区の研究大会等の成果により、身近な題材の活用、単元で生徒に身に付けさせたい力を踏まえた学習課題の設定や指導過程、目的に応じた学習形態の工夫やICTの効果的な利用等が、生徒の学習意欲を高め、4技能を総合的に育成するために効果的であることが分かった。

平成30年度の学力調査の結果から経年の変化を把握・分析すると、基本的な言語事項や自分の気持ち、意見を述べる力が徐々に定着してきていることがうかがえる。一方、全体の情報を整理して概要や状況を的確に聞き取ったり、相手が伝えたいことや必要な情報を見極め、読み取ったりする力を育成するよう、さらなる指導の工夫が必要である。

以上のことを踏まえ、今年度も、4技能を総合的に育成するための言語活動の工夫について研究を深める。3年間で身に付けさせたい力、すなわち「英語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確にした活動を行う。その中で、日常的な話題や社会的な話題について、学んだ知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できるような技能を養いたい。その際、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動を積極的に取り入れていきたい。また、小学校における指導の内容や実態を把握し、目標の一貫性や学習内容の系統性、指導方法の継続性等を考慮するなど、小・中・高各学校段階の学びの接続を意識して、年間指導計画等の作成に努めたい。教師自らが学び続け、英語力や授業力を向上させるとともに、生徒の主體的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進め、主題の解明に取り組んでいきたい。

III 研究内容とその視点

1 指導計画の工夫

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した5領域別の学習到達目標を活用し、実際のコミュニケーションの場面を意識した言語活動を、生徒の実態に合わせて計画的・継続的に行う。その際、学習到達目標を具体化した単元の目標を設定し、達成状況を把握しながら、指導と評価の一体化へとつなげる。
- (2) 小・中・高の円滑な学びの連続性を意識する。小学校の外国語活動で養った素地をもとに、高等学校の目標・内容の高度化に向けた基礎を培う観点から、さらにコミュニケーション能力を養うための指導計画を立てる。
- (3) 特に、中学校の入門期である1学年の指導を充実させるとともに、「音声と文字」の関係に触れた学習を指導計画に位置付ける。なお、小学校で扱った学習内容を繰り返し指導し定着を図るよう考慮する。

2 言語活動の工夫

- (1) 生徒が既習の言語材料を言語活動の中で繰り返し学習し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得できるように留意する。
- (2) 実際の必然性のある具体的な言語の使用場面を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けられるようにする。
- (3) 実際の場面で思考・判断し、即興で伝え合う力を付けるような言語活動を工夫する。
- (4) 互いの考えや気持ちを英語で伝え合おうとする意欲につながるよう、家庭での生活、学校での学習や活動、地域の行事等の日常的な話題や社会的な話題と関連付けた言語活動を取り入れる。
- (5) 「聞くこと」「読むこと」を通して得た内容について、生徒が自らの体験や考え等と結び付けながら思考・判断し、「話すこと」「書くこと」を通して意見や感想等を発信できるようにする。

3 指導方法の工夫

- (1) 英語による言語活動を行うことを授業の中心とし、生徒が授業の中で英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実させる。その際に、ペアワークやグループワークといった学習形態を取り入れ、生徒が協働的に学習できるようにする。
- (2) 小学校で扱った簡単な語句や基本的な表現等の学習内容を繰り返し指導し、定着を図るようにする。また、語彙の充実については、活用頻度や活用のしやすさに配慮し、受容的な使用の中で、次第に発信的使用へと発展していくように言語活動と関連付けて指導する。
- (3) 各単元において、コミュニケーションを行う目的、場面、状況等を明確に設定し、どのような言語活動を行うかを示すことで、身に付けさせたい力を明らかにし、生徒が学習の見通しをもって、主体的に取り組めるように、指導過程を工夫する。
- (4) 生徒の英語学習への意欲を高め、理解が深まるよう、板書、課題提示、発問、モデルの演示、終末の振り返り等を工夫したりICTを有効に活用したりする。
- (5) 英語の基本的な音声や英語特有の文構造に習熟できるよう、日本語にない音や強弱を意識した発音練習、音の連結やイントネーション、区切りを明確にした音読練習等を工夫する。
- (6) ネイティブ・スピーカー等を効果的に活用し、広い視野から生徒の国際理解を深める。
- (7) 自律的な学習者の育成を目指し、辞書（語彙）指導、音読指導、多読指導、ノート指導、家庭学習の指導を計画的に行う。

4 指導と評価の一体化

- (1) 「CAN-DOリスト」の形で設定した学習到達目標に基づき、各単元の目標及び評価規準を設定する。また、学習の過程における形成的な評価を行い、指導方法の改善に生かす。
- (2) ねらいを明確にした授業の構想と、終末における学習成果の確認を重視する。
- (3) ペーパーテストによる評価に加え、面接、スピーチ等のパフォーマンステストを取り入れるなど、4技能5領域を適切に評価するための方法を工夫する。また、生徒が目標をもって主体的に学習に取り組めるよう、評価方法や評価規準、評価基準を事前に示す。
- (4) S-P表等を活用して学力調査等の結果を分析し、生徒のつまづきや全体の傾向を把握して、指導の改善に生かす。

IV 研究方法

- 1 研究主題の趣旨に沿って、各学校・郡市・地区で、研究授業や研究発表を中心に研究を進める。
- 2 部会や専門研修会等で、研究に関する情報交換に努め、相互に啓発し合い指導の改善に生かす。
- 3 学力調査等の分析結果を活用し、指導と評価の一体化を図り、指導計画や指導方法を見直す。
- 4 研究のまとめを作成し、共有した研究の成果と課題を踏まえて次年度へと継続研究していく。

